

77 カラヴァッジョのバロック・リアリズム

聖マタイの召命

2024

真鍋友範



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

*呼ばれたのは、机に寄りかかる眼鏡を持つ老年の収税吏

1 何故、カラヴァッジョは、モデル使用に拘ったのか

まず、前もって用意したデッサン集では、必要なポーズが見つからない。必要なポーズは、モデルにポーズを取らせるしか他に方法はない。まだカメラなどない時代だ。

従って、見る側は、モデル役の身体動作をよく精査しなければ、せっかくカラヴァッジョが苦勞して作ったポーズ使用の効果が無駄になるのだ。

2 カラヴァッジョのリアリズム表現は軽視されている

現在、現地ローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂コンタレッリ礼拝堂にある《聖マタイの召命》は、劣悪な展示環境にある。

現在ローマ・カトリック教会の伝えるマタイは中央のヒゲの男とする説は誤っている。同時にうつむいた左隅の若い収税人という説も誤っている。

双方説共に、登場人物の一部の身体動作しか見ていない。

具体的には作品を正面から見るできない為、イエスの左手や右足の持つ重要な身体動作の意味が埋没している。

これでは作品の正確な理解ができない。

【カラヴァッジョを真に理解するためには、その正確なリアリズム表現の身体動作を読み込まなければならない。】

3 リアリズム描写の内容こそ確認すべき

カラヴァッジョのリアリズム、正確にはバロック・リアリズムとは、単にモデルを使って表面を正確に描いただけではないのだ。

観衆側の作品読み取りが進むにつれ、動画のように目の前で場面展開し、驚愕の結論に至る劇場的仕掛けが、この絵画には隠されている。これこそバロック絵画の真髄なのだ。

ここを読み取らない今日までの誤判断は、主観的な判断により勝手にカラヴァッジョ絵画を捻じ曲げていると言っても過言ではないのだ。

4 順を追った正確な読み取り

まずは、正確な読み取りができるよう、真正面から絵画鑑賞できる環境を整えるか、できないなら正確な情報を伝える施設を美術館に創設すべきだ。

暗い展示環境を、もう少し明るい照明環境に変え、理解を深めることに協力すべきだ。

そうすれば、すぐに《生マタイの召命》への正しい理解を取り戻せるだろう。

そして、絵画表現に及ぼしたカラヴァッジョのバロック・リアリズムの本質が理解されることになるのだ。

結論として、バロック・リアリズムは、正しい鑑賞態度を取り戻して、初めて理解されるものだ。

【斜め下からの乱暴な鑑賞把握で理解する絵画ではない】のだ。

従って、カラヴァッジョに続くカラヴァッジェスキたちの作品も、同じように詳細な身体表現の観察に基づき、ストーリー展開を、一つひとつ読み込む必要があるだろう。

別途、当観点からの検証を行う予定だ。